



TITLE:

雜録

AUTHOR(S):

CITATION:

雜録. 日本外科宝函 1928, 5(1): 157-159

ISSUE DATE:

1928-01-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/200101>

RIGHT:

三八、特發性總輸膽管囊腫治驗

大阪 加藤亮之輔
五十嵐修三

特發性輸膽管囊腫又ハ擴張ニ關スル報告ハ約八十五例ヲ算シ、内約十五例ハ本邦ニ於ケルモノナリ、本症ハ黃疸、疝痛、腫瘍ヲ以テ主徴候トナスガ故ニ適確ナル診斷ヲ得ル事困難ナル場合多ク、且ツ豫後ハ一般不良ナレドモ余等ノ實驗セシ例ハ稀有ナル巨大ナ囊腫ニシテ而モ術後ノ經過極メテ良好ナリ

雜 錄

京大外科雜誌抄讀會

十一月二十八日(月)午後六時半。

於樂友會館

演 題

- 一、胃切除ニ於ケル無菌的操作 河田君
 - 二、胃潰瘍ニ對スル膽囊胃吻合術 神部君
 - 三、盲腸及上行結腸ノ捻捩(三例報告) 林君
 - 四、人工膀胱造設 阪田君
 - 五、交感神經ト腫瘍發育トノ關係 横田(宗)君
 - 六、脚部閉塞性動脈內膜炎ノ一療法 青柳君
- 綜説、痔疾ノ本體ト治療法 大澤助教授

キ。

患者ハ二十五歳ノ男子ニシテ昭和二年四月十日頃ヨリ右側上腹部ニ疼痛發作ヲ生ジ食慾不振、睡眠障碍等ヲ訴ヘ六月十二日頃ヨリ腹部ノ膨滿、黃疸ヲ認ムルニ至リ七月七日腹腔腫瘍ニ膽石症ナル診斷ノ下ニ開腹術ヲ行ヒタルニ黃褐色膿樣惡臭性內溶液約四〇〇〇ccヲ入ル、人頭大以上ノ總輸膽管囊腫ナル事ヲ確メタリ。

此ノ際行ヒタル術式ハ輸膽管十二指腸吻合術及ビ囊腫壁ノ可及的切除ナリシガ經過良好ニシテ術後二十四日目ニ治癒退院セリ。

十二月廿二日(木)午後六時。

於樂友會館

演 題

- 一、腎臟摘出手術後ニ於ケル股動脈栓塞ニ就テ 黃田君
 - 二、重複腎ニ於ケル腎臟水腫半部剔出例 下田君
 - 三、術後ノ尿閉ニビロカルビン靜脈內注射 田淵君
 - 四、一側性糖尿ニ就テ 荒木君
 - 五、慢性膿胸 由茅君
 - 六、膝痛ニ就テ 近藤君
 - 七、胃腸吻合術後ニ於ケル出血ニ就テ 巽君
- 綜説、レントゲン線ニ就テ 塚原講師

◎鳥潟教授通信

在伯林、鳥潟教授より京大外科辻村氏の許に寄せられたる御便りを先生並びに辻村氏の許容を得て次に掲載することゝ致しました。(編輯部)

十月十九日附の御手紙及び開胸術の一例報告原稿昨晚落掌致し候、其後御一同御健康のよし何よりに存候。磯部、伊藤兩教授にも頓と御無沙汰致居候が御健在にて何よりに存候宜敷御傳へ被下度候。自分は十日程前から例の感冒にて原稿書きの速力も多少緩に相成候ひしが昨日あたりから平素の氣分に相成り居候故御休神被下度候。今度は頑張りて一度も臥床せず朝起きるとすぐ熱い風呂に入り何回も發汗せしめ候。それでも大體治るには一週間かゝり申候。一度細菌感染が起ればそれを一週間以前に治すといふことは天則に反することの様に候。抗體の產生が確實に立證されるのも最短先づ一週間目に候故、それもこれも關聯した事に可有之と考候。事實で理論を吟味し、理論でまた事實を吟味し、それで兩々相待つてはじめて物が言へることに候。自然科學は事實を主とするといふことを何處かで聞き噓りて理論も何も考へず單に「これは事實だ」「これは事實だ」と主張して廻る者も有之候。理論上許容の出來ぬことを「事實だ」として主張する者もあり候。それはつまり事實は事實でも皆な「誤りたる事實に候」。此の様な際には一度も實驗しなくても頭の中で考へた推論上の事實の豫想の方が餘程確實なものに候。それ故にいつの場合でも『ある事實』に臨んでは、それは理論上可能なるべきか否か、理論上合理的なるべきか否かを必ず叩いて見る様になされ度候。理論考究の伴はぬ事實なるものは頭腦の無い人間(無腦兒)と一般にて學術上何の役にも立たぬものに候。平壓開胸術もまた然り。たゞ『手術が出来るぞ出来るぞ』と申してもそこに理論上合理的なりとの考察が缺けて居るならば、それは偶然の事實で必然のものでは無いことに相成申可候。之に反して理論上合理的なりと

一五八 (第壹號 一五八)

の考察があるならばよし事實上平壓開胸術が一、二度位不成功であつたにしてもそれはやり様が當を得て居なかつた結果であるといふことに相成り、結局理論が事實を支配し指導することに相成申可候。即ち「不成功であつた」といふことは事實は事實でもそれは「誤つた事實」の一例に相成り可申候。同様に過壓裝置の下にて開胸術が出来るぞ出来るぞと申して見た所でそこに過壓裝置の必要缺く可からざる所以の理論がそれに隨伴せぬ限りはそれは偶然の關聯にて必然的のものにては無きことも相成り可申候。それ故に手術が出来たとか出來ぬとか或はどの様な巨きな腫瘍を取つたとか取らぬとか申し争ふのは一體非常な末葉にて根本はたゞ過壓裝置が必要なりと申す理論、それが無用なりと申す理論即ち頭腦の争ひに歸着致すべく候。それ故に平壓開胸術で今後五六回位患者がその直接の結果として死亡する様な事がありてもすこしも我が教室は動搖する必要は無之候。毎度申候通り汽船は最初から水に浮ばず飛行機も何回も墜落して居る次第に候。幸にして今日迄平壓開胸術そのものの爲に死亡した例の無かりし事は教室の爲にも斯道の爲にも御同慶の至りに候。古聖賢の語に久而敬之と申候。だんだん開胸術に馴れるに従てそれを無意的に粗末に行つて不結果を來さぬ様に御心懸け下さるべく候。

原稿は即坐に添削済み明月曜發送致すべく候。此の中で一、二御注意致度きことがあり候、これは一般的に御傳へ被下度候。第一、人間に就ての實驗を實驗と申さぬ様にする事實實驗は Experiment の語に、はまるだけに候故人間の場合には經驗とか實見とか實例とか申した方がよろしく候。第二「平壓開胸術の可能なる事は學會の認むる所となり云々」の件。これはよく人の言ふ事に候。學界が認めたとか、學會が認めたとか、世の中が一般に認めたとか、何某も何氏も認めたとか申し立て、それで自身のやつた研究なり主張なりが真理であるかの如く他人の信用を得んと欲する記載に候。これはよく人のやることなれどもそれは學者たり研究者たる自覺の無き者のすることにて不見識の甚だしきものに候。學界(會)だの、世の中だの、何某、何氏だの、

それは何れも學術上自分よりは非常に低級なる者共に候。然らざれば自分の説や自分の研究は最上最高のもので斯道最大の權威者とは申されぬ譯に候。斯道の第一人者よりも非常に低級なる者等が「認めた」とか「認めぬ」とか申し見た所でそれはその主張なり研究なりの學術的價值を毫末も上下し得ぬものに候。それ故に斯道の研究者が自分よりも低級なる者を引き合ひに出して「それが認めた」と申し立てゝそれで少しでも自分の研究的價值を高めた他人の信用を博せんと試みることは非常なる不見識にて結局『その者の主張や研究はそれだけつまらぬものなり』と申すことに歸着致すべく候。それ故に眞に研究者たり學者たる自覺のある者は『自分と同一の研究を遂げた某氏もまた自分の主張を容れたり、自分と同じ結果を得たりと書くことはよろしいけれども、何もわかりもせぬ學會が認めたことの世の中が認めたことなど申す記事は一切書かぬことに候、その様なことを考へもせぬ事に候。それは學者が自分から自分を下落せしむる譯に相成可申候。それ故に研究者は自分のやつた事が古今東西最上の權威を持つて居るものなりとの強烈な自信が無くてはなり不申候。此自信は學術研究を正しき研究方法で遂行して居ると自分自身でその眞偽が立證出来ることによりて何よりも強烈なるものに相成るものに候。他人が認めたなどを引合ひに出す必要がなくなるものに候。此點では先生も先輩も無いものに候。ましてや此の道を研究したでも無き學會一般や民衆やその他の通俗的巨頭(?)が認めたとか認めぬとかその様なことはてんで問題に致すべき限りにては無之ものに候。巨萬の富を以てども、政治上の權力を以てども、社會上の地位を以てども、また自分自身の自由意志を以てども如何ともすることの出来ぬものは自然科學上の事實に候。政治家にもならず、商賈人にもならず、官吏にもならず、美術家にもならず、軍人にもならず、たゞ自然科學の研究者となつて一生を送る譯は此の如く他から如何とも上下することの出来ぬ確實なるものに立脚してその最高の權威者として男性の意氣を千載の後に貽さんと欲するに在ることに候。研究室に居る諸君

は一人づゝ何れも皆此の考を持つて居られたく候。此の自覺があるならば「平壓開胸術の可能性なることは學會の認むる所となりたり」などは申されぬ事と相成可申候。これでは「平壓開胸術を主張する人」よりも『學會』の方が學術的に優越して居る様なことの譯合に相成り滑稽に感ぜられ可申候。かくの如く何の頼りにもならぬ低級にして滑稽なる者等にからみつゝ(纏絡)して自分の信用を博せんと試みることは相當に研究者らしき面をしてゐる人もやつて居る様に候へども實は何れも『研究者の偽せ者共』に候。外科研究室の諸君は決してそれに迷はされぬ様になされ度候。また決してその眞似をせぬ様に御要心なされ度候。自然科學の研究者たる眞の自覺を振り起して事の大小は論ぜずたゞ硬度の一番大なるもの(つまり他から傷けられ得ぬもの)を仕上げて各自その方面での最高權威者となる様に御努力被下度候。而してその研究結果を以て更に學界を指導し民衆を教化することはまた研究者の權利でもあり義務でもあり候。(下略)